



## 西鶴浮世草子の中国語訳についての研究

— 錢稻孫訳『近松門左衛門・井原西鶴選集』を中心に

はじめに

一九八七年、井原西鶴の浮世草子の中国語訳本が初めて出版された。すなわち人民文学出版社の『近松門左衛門・井原西鶴選集』である。翻訳者の錢稻孫(QIAN DAOSUN)はすでに一九六六年にこの世を去っている。「日本文学叢書」のシリーズの一環として出版されたこの翻訳集には、西鶴の町人物の代表作『日本永代蔵』と『世間胸算用』及び近松門左衛門の浄瑠璃四作品、『曾根崎心中』・『心中天の網島』・『景清』・『俊寛』が収録されている。この初版本は二千冊ほどしか発行されず、現在入手困難の状態である。一九九六年人民文学出版社による再版『近松門左衛門・井原西鶴作品選』(『資料1』写真1)が「世界文学名著文庫」のシリーズのうちの一冊として刊行され、二〇一一年と二〇一二年、上海書店出版社から「名家名作名訳」のシリーズとしてそれぞれ『井原西鶴選集』(『資料1』写真2)と『近松門左衛門選集』が刊行されている。<sup>①</sup>

錢稻孫と言えば、二十世紀三十年代から六十年代まで、長年に亘って日本文化・日本文学関連の書籍・作品を中国に翻訳・紹介した学者・翻訳家であり、『万葉集』、『源氏物語』、『伊勢物語』などを翻訳した中国翻訳界の第一人者である。錢稻孫の経歴、交友関係及びその翻訳作品について研究は十年前までは極わずかだったが、近年その業績が注目されるにつれ、関連研究が盛んに行われるようになってきた。以下、日中両国の研究者による錢稻孫及びその代表的翻訳

劉穎

作品についての主な研究成果をまとめてみた。

○小沢正夫「佐佐木信綱と万葉集の外国語訳」(『国語と国文学』第六十五卷第四号、一九八八年四月刊)

○松岡香「『万葉集』の中国訳について(そのI)——銭稻孫訳を考える」(『北陸学院短期大学紀要』第二十一号、一九八九年十二月刊)、「万葉集」の中国語訳について(そのII)：銭稻孫訳を考える」(『北陸学院短期大学紀要』第二十二号、一九九〇年十二月刊)

○王文敏「銭稻孫対日本文化的訳介評述」(北京師範大学文学院 二〇〇六年卒業論文)

<http://blog.cersp.com/index/1045448.aspx?articleId=524239>

<http://www.douban.com/note/154324132/> 参照)

○邱巍「銭稻孫：生平・学術和思想」(『吳興錢家：近代学術文化家庭的断裂与传承』、浙江大学出版社、二〇〇九年十月刊)

○吳衛峰「和歌の翻訳と異文化体験の問題——銭稻孫著『漢訳万葉集選』を中心に」(『東北公益文科大学総合研究論集』第十二号、二〇〇七年六月刊)、「白話か文言か：日本古典詩歌の中国語訳について(その3)：銭稻孫と『万葉集』の翻訳」(『東北公益文科大学総合研究論集』第十九号、二〇一〇年十二月刊)

○劉穎「中国における浮世草子の翻訳・出版とその研究について」(『西鶴と浮世草子研究』(第三号)特集・金錢』、笠間書院、二〇一〇年五月刊)

○鄒双双「銭稻孫訳一九五九年版『漢訳万葉集選』の成立経緯——佐佐木信綱宛銭稻孫未発表書簡十二通、鈴木虎雄書簡一通——」(『国文学』第九十五号、関西大学国文学会、二〇一一年二月刊)、「中国における『万葉集』の伝播と翻訳状況」(『日本文化学報』韓国日本文化研究学会、二〇一一年二月刊)、「佐佐木信綱選、銭稻孫訳『漢訳万葉

集選』研究——成立背景、出版事情、翻訳をめぐる——」（『東アジア文化交渉研究』第四号、二〇一一年三月刊）、「30年代の北京における銭稲孫像——日本人留学生の目を通して——」（『東アジア文化交渉研究』第五号、二〇一二年二月刊）、「翻訳家銭稲孫と日本文人の交遊——谷崎潤一郎と岩波茂雄を中心に」（『国文学』第九十六号、関西大学国文学会、二〇一二年二月刊）、「日本占領下の北京における文化人——銭稲孫と周作人を中心に——」（『近代世界の「言説」と「意象」——越境的文化交渉学の視点から——』（ICIS次世代国際学術フォーラムシリーズ第四輯、関西大学、二〇一二年二月刊）

○楊曉文「中国における『源氏物語』全訳の成立に関する一考察——豊子愷、銭稲孫、周作人のかかわりを中心に——」（『中国研究月報』、第六十六卷第二号、二〇一二年二月刊）

○金偉・呉彦「中国語訳『万葉集』について」（『富山大学芸術文化学部紀要』第六卷、二〇一二年二月刊）

○曾維徳「銭稲孫訳事小考」（『東方早報』二〇一三年一月二十七日、

[http://news.ieng.com/gundong/detail\\_2013\\_01/27/21640717\\_0.shtml](http://news.ieng.com/gundong/detail_2013_01/27/21640717_0.shtml) 参照）

○田中幹子、鄭寅瓏「銭稲孫訳『源氏物語』の特徴について（上）」（『比較文化論叢』二十八）、札幌大学文化学部、二〇一三年三月刊）

総じてみると特に研究の対象として主に取り上げられている銭稲孫の翻訳作品は一九五九年日本学術振興会刊行による『漢訳万葉集選』と一九五七年八月号の『訳文』という当時中国唯一の外国文学専門誌に掲載された『源氏物語』の「桐壺」の巻である。しかし、前述した銭稲孫が残したもう一つの貴重な文化財産、『井原西鶴選集』についての論考は管見の限り見当たらない。発表者は二〇一〇年五月笠間書院刊行の『西鶴と浮世草子研究（第三号）特集・金銭』で、

「グローバルゼーションの中の西鶴」の一環として、「中国における浮世草子の翻訳・出版とその研究について」と題する論文を発表した。その中で銭稲孫の経歴と日本文化の伝播への貢献を踏まえ、浮世草子研究における銭稲孫訳西鶴の二作品の重要性について論じた。

一般の中国人読者の日本近世文学に対する認識と理解は、『近松門左衛門・井原西鶴選集』が翻訳・出版されるまで、極めて乏しいものだったと言えよう。銭稲孫が翻訳した西鶴の二作品は、中国の日本文学翻訳家の文潔若が述べたように、中国における日本江戸文学の翻訳・紹介の空白を埋めたもので、ほかの誰にも取って代わることでできない銭氏ならではの偉業である。②日中双方の西鶴浮世草子研究者に、銭稲孫の功績を認識してもらおうのが本発表最大の目的である。以下、過去の文献に記されている銭稲孫の言葉から彼の日本観を探り、『近松門左衛門・井原西鶴選集』成立の歴史背景、翻訳手法について考察していく。また、銭稲孫と同時代をきたもう一人の日本文学の翻訳家周作人と西鶴作品の関連についても述べる。

### 一・ 銭稲孫の経歴とその日本観

銭稲孫の非凡な生い立ちは後の彼の偉業達成に大きな影響を与えている。銭稲孫は一八八七年中国浙江省呉興の文化人一族に生まれた。祖父の銭振常は一八七一年の清朝の進士、父親の銭恂は清朝の外交官で、草創期の早稲田大学図書館に多くの漢籍を寄贈したことで知られている。叔父の銭玄同は有名な言語学者であり、中国新文化運動の先駆者の一人である。母親の銭単士厘は近代中国の女性史に名前を残している才媛である。ゆえに言うまでもなく、名家の生まれの銭稲孫は中国文学の造詣が非常に深い。それに加え、幼い頃から、日本へ赴任した父に追随し、日本で教育を受けたことで、日本文化、文学に対する理解も深いのである。銭稲孫は一九三四年春のある談話の中で、次のように述べて

いる。<sup>③</sup>

了解文化は认识一个民族、一个国家最彻底的、最直接的、而且最有趣味的途径。

つまり、「文化を理解することは一つの民族、一つの国家を知る最も徹底的、もつとく直接的、且つ最も面白い手段である」というのである。錢稻孫は客観的に日本文化を評価し、敬意を払っていた。この信念は彼の中国における日本文化紹介の一連の功績を遂げた原動力ではないかと思う。

錢稻孫は日本文学に拘らず、幅広い分野の日本文化を中国へ紹介していた。例えば一九三五年、彼は日本史学者・秋山謙蔵の著書『日支交渉史話』の書評を書いている。その中で、次のように述べている。<sup>④</sup>

我們對於日本確是太没研究了；此其原因，恐怕與其說是自大之故，無寧說是太懶惰了。我們讀了此書，应当得到許多多的觸發警語。

「我々は日本についての研究は極めて不足している。その原因は、自大のせいというより、むしろ怠惰であろう。この本からは多くの感動と刺激をもらえるはずである。」とあるように、錢稻孫は当時の中国人読者に日本理解を呼びかけていたようである。

また、一九四三年、錢稻孫は当時東京美術学院教授の矢代幸雄の新作『日本美術の特質』を翻訳紹介し、次のように述べている。<sup>⑤</sup>

中国与日本、同是東亜（文化）的一系、有父子兄弟之親、中国是東亜文化的淵源、日本是其中的一支、然而分支与本根、只是系統、并不就是價值、应当知道、中国与日本同出一系、而特色各異——二者是東洋文化史上的一對并蒂花。

中国と日本は、同じく東アジアの一系であり、親子と兄弟のように親しい。中国は東アジア文化の源、日本はその支流であるが、しかし分枝と根本と言っても、系統の構造からいうもので、価値の貴賤が存在するものではない。中国と日本は同じ系統から生まれながらも異なる特色を持つ国であることを知っておくべきである——両者は東洋文化史上の同じ茎に咲く二つの花である。（発表者訳）

右のように、当時の中国人の「自尊自大」の風潮に警鐘を鳴らし、日本への理解と正当な評価を訴えている。錢稻孫の日本観を明確に伺える一節と言えよう。

## 二、『近松門左衛門・井原西鶴選集』成立の背景

### 1、『源氏物語』訳本との関係

文潔若の「『源氏物語』はいかに訳された」によると、一九五〇年代の終わり頃錢稻孫は人民文学出版社の依頼を受け、『日本永代蔵』と『世間胸算用』と近松の浄瑠璃の翻訳に取りかかり、原稿が出版社へ提出されたのは一九六三年のことだった<sup>⑥</sup>。ところが、政治的混乱が続き、文革大革命が始まると、錢稻孫は迫害を受け、一九六六年夏に亡くなったという。近松と西鶴の作品の翻訳は、二十年以上も寝かされ、一九八七年ようやく出版されたのである。

当時の人民出版社の編集者だった文潔若によれば、一九五九年、人民文学出版社当初が銭稲孫に翻訳を依頼したのは『源氏物語』だった。しかしその後、銭氏の翻訳作業が遅いとの理由で、翻訳の依頼が出版社側によって取り消されたという。<sup>⑦</sup> 当時、銭稲孫は『源氏物語』の翻訳作業を五帖まで終えていた。『源氏物語』の代わりに、人民文学出版社が銭稲孫に与えた仕事こそ、西鶴と近松の翻訳の仕事だった。新たに『源氏物語』の翻訳者として起用されたのは豊子愷である。銭稲孫は周作人とともに、豊子愷訳の『源氏物語』の校訂・鑑定作業に携わっていたことがあまり知られていない。銭稲孫自身が手掛けた『源氏物語』五帖の翻訳原稿は、文化大革命のさなか、残念ながら散逸した。中国の読者にとって、銭稲孫訳『源氏物語』の出版が実現できなかったことは確かに遺憾な出来事だが、しかし、代わりに銭稲孫による西鶴と近松の作品の翻訳が行われていたことが、極めて幸いな出来事と言えよう。

## 2、周作人と西鶴作品

日中両国の研究者の間で、銭稲孫の僚友・周作人に関する研究が盛んに行われている。関連する著書や論文の数が多く、幅広い視点からの調査と研究がなされている。銭稲孫と周作人は日本文学への貢献度がともに高く、当時の日本文学の間でよく知られていた存在だった。中国文学者の吉川幸次郎は二人について次のように評している。<sup>⑧</sup>

日本文学に対するまともな関心と尊敬は、今世紀にいたってはじめておこった。そうして本書の訳者である銭稲孫先生と、その僚友である周作人先生とを、先達とする。周先生の業績は『狂言十番』の翻訳によって代表され、銭先生の業績は、すなわちこの万葉の翻訳によって代表される。



二十世紀三十年代から六十年代までの間、錢稻孫と周作人は数多くの日本文学、文化の書籍を中国語に翻訳し、中国における〈日本理解〉の基礎を築くうえで極めて大きな役割を果たしたと言えよう。

さて、これまでの研究では、周作人と浮世草子を結びつけることがなかったが、今年一月、広西師範大学出版社から出版された早稲田大学の小川利康と中国人研究者止庵によって編著された『周作人致松枝茂夫手札』（周作人から中国文学者松枝茂夫への書簡集）の中に、周作人と浮世草子との関連を窺わせる記述が確認されている。その中には、一九五九年周作人が出版社から『好色一代女』、『好色一代男』の翻訳依頼を受けたことが書かれている。しかし、その後の時勢により西鶴の好色物の出版が難しくなり、周作人は翻訳の準備段階で挫折したそうである。その直後、西鶴の町人物の翻訳依頼が錢稻孫に届いたようである。

### 三. 錢稻孫の翻訳手法

錢稻孫の翻訳した西鶴作品の出来映えについて、『平家物語』の翻訳家として知られる申非は次のように評価している。<sup>⑩</sup>

力図符合原作的文章風格、雅語与俗語兼用、時庄時諧、很是得体

錢氏は原作の文章の風格に符合させようとつとめており、雅語と俗語とを併用し、時には莊重であり、時には諧謔であって、きわめて的を得たものとなっている。（発表者訳）

確かに、錢稻孫は西鶴の作品を絶妙な中国語で翻訳している。錢稻孫は西鶴作品の文体を考慮し、中国語訳に用いたのは現代中国語ではなく、明清時代の白話小説に近い文体を採用している。従って、明清時代と何処となく類似する江戸時代の情緒が損なわれずに再現されている。本文は勿論のことながら、各話の副題にもそうした工夫が窺える。例えば、『日本永代蔵』の巻一の場合、五つの話の副題は以下のように訳されている。<sup>⑩</sup>

『日本永代蔵』巻一

- 一 初午は乗て来る仕合 江戸にかくれなき俄分限／泉州水間寺利生の銭
- 二 二代目に破る扇の風 京にかくれなき始末男／一步拾ふて家乱す倅子
- 三 浪風静に神通丸 和泉にかくれなき商人／北浜に箒の神をまつる女
- 四 昔は掛算今は当座銀 江戸にかくれなき出見せ／一寸四方も商売の種
- 五 世は欲の入札に仕合 南都にかくれなき松屋が跡式／後家は女の鑑となる宿

『日本致富宝鑒』巻一

- 一 初午転来好運氣 水間寺放利生銭／江戸城添暴発戸
- 二 邪風淪落第二代 齋刻漢名聞京国／拾分金兒子蕩家
- 三 神通丸一帆風順 和泉賈名聞豪富／北浜女供掃帚神
- 四 往時除帳今售現 開分店伝名江戸／一方寸也是財源
- 五 時運転開彩得彩 南都松屋中興業／女鑿成名寡婦居

と訳している。所謂「三言二拍」の題目の格式を想起させる見事な翻訳と言えよう。錢稻孫の翻訳した『日本永代蔵』と『世間胸算用』の文章を読むと、その蘊蓄の深さに感心せざるを得ない。文学作品の翻訳は、翻訳者に外国語に精通することが要求されるだけでなく、母国語ないし母国文学の高い教養が要求される。錢稻孫はまさにこの条件を完璧に備えた人物である。

次に、『日本永代蔵』巻一の冒頭文の翻訳を例に錢稻孫の翻訳を見てみよう。<sup>②</sup>

### 『日本永代蔵』巻一

初午は乗てくる仕合

天道言ずして、国土に恵みふかし。人は実あつて、偽りおほし。其心は本虚にして、物に應じて跡なし。是、善悪の中に立て、すぐなる今の御代を、ゆたかにわたるは、人の人たるがゆへに、常の人にはあらず。一生一大事、身を過るの業、士農工商の外、出家・神職にかぎらず、始末大明神の御託宣にまかせ、金銀を溜べし。是、二親の外に命の親なり。人間、長くみれば、朝をしらず、短くおもへば、夕におどろく。されば天地は万物の逆旅、光陰は百代の过客、浮世は夢幻といふ。時の間の煙、死すれば何ぞ、金銀、瓦石にはおとれり。黄泉の用には立たし。然りといへども、残して子孫のためとはなりぬ。ひそかに思ふに、世に有程の願ひ、何によらず銀徳にて叶はざる事、天が下したに五つ有。それより外はなかりき。是にましたる宝船の有べきや。見ぬ鳴の鬼の持し隠れ笠・かくれ簀も、暴雨の役に立ねば、手遠きねがひを捨て近道に、それぞれの家職をはげむべし。福德は其身の堅固に有、朝夕油断する事なかれ。殊更世の仁義を本として、神仏をまつるべし。是和国の風俗なり。

一 初午転来好運氣 水間寺放利生錢／江戸城添暴発戸

天道不言，而惠深国土；人则虽有其真实，而虚伪殊多。盖其心本属虚空，随物迁变，了无痕迹。因此，能够立足在善恶二途的中间，把当今这直道盛世的日子坦荡荡地度过，才是人之所以为人指导，也就不是个寻寻常常的人了。一生的唯一大事，就在营生度日；士农工商自不待言，甚至出家的和尚、庙祝神官，也无不须听从节俭大明神的点化，积攒金银。这乃是生身父母之外的衣食父母。人生意识，若说长么，今日不知明日事；虑其短么，则朝夕都足心惊心。所以，有道是……天地者，万物之逆旅；光阴者，百代的过客。浮生只是一场梦幻，一霎间的一缕云烟，一死之后还有什么呢？金银简直不如瓦砾，黄泉路上没有它的用处。可是，虽这么说，留将下来，毕竟有益于子孙。仔细想来，世上不拘什么愿望，其中仗凭金银的威光而不能如愿以偿的，普天之下只有生老病死几件事，除此而外，再无其他，所以说，可宝贵的再没有胜得过金银的了。凡人眼里见不到的神仙岛上，神鬼身上的藏形笠帽，隐身蓑衣，也搪不得狂风暴雨。所以一些迂远的愿望，不妨抛开，径抄近道，各自励精家吧。福气在于身体健壮，这是一朝一晚都疏忽不得的。尤其紧要的是以义理人情为本，虔心供养神佛。这乃是我国的风尚。

この冒頭文の原本は、短い導入部でありながら、西鶴研究者の間で、極めて「難解」と評されている。浜田泰彦が「『日本永代蔵』冒頭文考——古典驅使と銀徳への（ひそかな思い）をめぐって」において述べているように「他の西鶴作品にも見られる省略法ないし圧縮などの独特な修辭法」が使われているほか、先行文献を多く織り込んだ「古典驅使」がなされている<sup>⑬</sup>。しかし、現代日本語に訳すことも難しいこのような西鶴の文書を、錢稻孫が見事な中国語の文書に訳している。例えば、最初の「天道言ずして、国土に恵みふかし」を、「天道不言，而惠深国土」に訳し、本文引用にあ

るように、「ひそかに思ふに、世に有程の願ひ、何によらず銀徳にて叶はざる事、天が下したに五つ有。それより外はなかりき」を、「仔細想来、世上不拘什麼愿望、其中仗凭金銀的威光而不能如愿以偿的、普天之下只有生老病死几件事、除此而外、再无其他」と訳している。「天が下したに五つ有」の「五つ」について、何をさしているのかは諸説があるが、錢稻孫が「生老病死」と訳していることは、中国人の固定観念に近い考え方であり、自然な訳といえる。

#### 四. 現在の西鶴浮世草子の中国語訳の出版状況

西鶴の町人物は中国では「経済小説」と呼ばれ、西鶴の好色物は「好色小説」或いは「艶情小説」と呼ばれている。その西鶴の所謂「艶情小説」の代表作『好色一代女』と『好色五人女』の中国語訳書が初めて刊行されたのは一九九〇年のことであり、『好色一代男』の中国語訳書に至っては一九九四年になってようやく刊行されたのである。

一九八〇年代なかば、王向遠が西鶴作品の翻訳に取り組み始め、一九九〇年九月に上海訳文出版社から西鶴の翻訳集、【資料2】写真1に掲げた『五个痴情女子的故事』を出版した。この翻訳書は西鶴の四つの作品、即ち『好色五人女』、『好色一代女』、『日本永代蔵』、『世間胸算用』を翻訳したものである。これら四作品の作品名はそれぞれ、『五个痴情女子的故事』、『一个荡妇的自述』、『日本致富经』、『处世费心机』と、中国風に変えられている。この翻訳書は中国で出版された最初の西鶴の翻訳作品集であるが、その後再版されることなく、多くの読者の目に触れていない入手困難の一冊である。

一九九四年八月、文潔若の要請を受け、劉丕坤、張鼎衡訳の『好色一代女』が「日本文学名著叢書」の一冊として、訳林出版社より刊行された。【資料2】写真2『好色一代女』には錢稻孫の『日本永代蔵』、『世間胸算用』も収録されている。一九九四年十二月には、王啓元、李正倫訳の翻訳集『好色一代男』が山東文芸出版社より刊行されている（資

料2】写真3)。「日本古典文学名著」シリーズの一部として出版されたこの翻訳書は『好色一代男』のほか、『好色一代女』と『好色五人女』をも収録している。『好色一代男』の中国語訳本はこれが最初である。王啓元、李正倫の両者は、一九九六年九月、『好色一代男』の翻訳一冊と、『好色一代女』と『好色五人女』の合冊一冊——書名『好色一代女』——を、漓江出版社から新たに出版している(【資料2】写真4)。更に、二〇〇四年二月にも、王・李両者は『好色一代男』と『好色一代女』(附『好色五人女』、【資料2】写真6)と題する二冊の翻訳書を中国電影出版社から出版している。このように、同一翻訳書を複数回、且つ異なる出版社で出版することは日本では考えられないことだが、中国読者の間ではひそかに西鶴の浮世草子ブームが起こっていたことが伺える。

【資料2】の写真のように、中国で出版された一連の西鶴浮世草子の翻訳本の表紙は殆ど浮世草子の時代に合っていない絵が載っている。専門家の欠乏と誤ったイメージが原因であろう。総じて中国では、本のタイトルは「好色」と掲げただけで、中国人に『金瓶梅』のような艶書と連想させ、販売促進につながる。中国では営利目的で、西鶴の好色物を「禁書」と掲げて刊行する出版社もある。【資料2】写真5、『好色一代男』(附『好色五人女』、『好色一代女』)は、「世界十大禁書」というシリーズのうちの一冊である。裏表紙に「日本的『金瓶梅』」、「日本、色情文化、的集大成之作」と目を見張る言葉が羅列されている。ちなみに、該シリーズのその他の作品は殆ど欧米の現代官能小説である。更に検証すると、本書の翻訳の内容は、ほぼ前述王啓元、李正倫訳本の丸写しのようなもので、たぶん剽窃の可能性を窺わせる。

### 終わりに

周作人に関する膨大な研究成果に比べると、錢稻孫に関する研究論文の数が少なく、研究書に至っては皆無である。

錢稻孫に関する研究はまだ始まったばかりと言っても過言ではない。確かに、周作人は近代中国で起こった新文化運動の中心人物の一人として、文化的な地位は高い。しかし、日本文学を中国に翻訳・紹介することにおいて、その実力と貢献度は錢稻孫と比べて実に優劣をつけ難い。今後、引き続き、錢稻孫の『近松門左衛門・井原西鶴選集』について、より綿密な考察をおこなっていききたいと考えている。

【注】

- ①上海書店出版社のこの「名家名作名訳」シリーズには計五つの作品が収録されている。一つの作品はアメリカ作家マーク・トウエインの「トム・ソーヤ」の探偵」の中国語訳で、ほかの作品四点——「井原西鶴選集」、「近松門左衛門選集」、「万葉集精選」、「東亜楽器考」（日本の音楽学者林謙三の「東アジア楽器考」）はすべて錢稻孫の翻訳である。
- ②文潔若「我所知道的錢稻孫」（一九九一年「読書」一月号に掲載されているが、二〇一一年八月上海三聯書店出版の「風雨憶故人」に補訂版が収録されている。）参照。
- ③顧良「周作人和錢稻孫——我所知道的兩個認識日本的人」（『宇宙風』一九三五年第二十七期 <http://www.douban.com/group/topic/21957174/> 参照）
- ④「清華學報」一九三五年第三期。
- ⑤錢稻孫「新刊、日本美術之特質。(一)」「J」、『日本研究』1(2)北平 一九四三年
- ⑥「人民中国」二〇〇六年六月号参照。
- ⑦注①に同じ。
- ⑧吉川幸次郎「跋」(錢稻孫『漢訳万葉集選』日本學術振興會 一九五九年三月刊)
- ⑨曾維徳「錢稻孫訳事小考」(『東方早報』二〇一三年一月二十七日、[http://news.ifeng.com/gundong/detail\\_2013\\_01/27/21640717\\_0.shtml](http://news.ifeng.com/gundong/detail_2013_01/27/21640717_0.shtml) 参照)
- ⑩近松門左衛門 井原西鶴作品選(『世界文学名著文庫、人民文学出版社、一九九六年十一月刊)「前言」参照。
- ⑪「日本水代蔵」のテキストは「日本古典文学大系四十七・西鶴集(下)」（岩波書店、一九六〇年刊）、『日本致富宝鑑』のテキストは「近松門左衛門 井原西鶴作品選」（世界文学名著文庫、人民文学出版社 1986年11月刊）による。振り仮名を省略した。
- ⑫注①に同じ。
- ⑬大阪大学大学院文学研究科「待兼山論叢」文学篇第四十二号 二〇〇八年十二月刊。
- ⑭文潔若著「風雨憶故人」所収補訂版「我所知道的錢稻孫」参照。

\* 討論要旨

相田満氏より、錢稻孫訳の文体について質問があった。日本語から中国語へ翻訳を行う場合、一般的には原文よりも短くなる。錢稻孫訳「源氏物語」桐壺の巻にもその傾向が認められるとの研究があるが、本発表資料の近松作品の錢稻孫訳では訳文の方が長い。確認すると、明清時代の白話体のように四字熟語の対句が修辭的に頻繁に用いられ、語調が整えられているようだ。こうした文体は「莊重」であると評価してよいのか、文体が及ぼす影響は何か、と相田氏は説明を求めた。発表者は、錢稻孫は周作人のように一貫した翻訳理念を持つのではなく、作品ごとに手法を変え、原作が書かれた時代に相応する中国の代表的作品を参照し、訳している。例えば、西鶴作品であれば中国明清の資本主義萌芽期の通俗小説を参照し、それを中国の読者に連想させやすい白話体に近い訳を試みている。「源氏物語」の場合には読者に「紅樓夢」を連想させるような、風格ある文体の訳し方になっている。一番多く研究者に取り上げられている「漢訳万葉集選」では古典的文体の高度な訳になっていると回答した。

次に、板坂則子氏より、錢稻孫が一度訳した作品は何回も出版され、禁書となることもブームになることもあったと発表の中で言及されたが、その出版規模、読者層はどうだったのかとの質問があった。発表者は、「近松門左衛門・井原西鶴選集」が1983年以降、様々な翻訳全集・作品集に収録されたことで広く世に流布した。読者に認められたがゆえ、収録が繰り返されたと考えられる。西鶴の好色物は中国の一般の読者には猟奇的な作品と見られたが、江戸文学・西鶴の作品が中国で知られる契機をもたらしたと応答した。

陳高峰氏より、錢稻孫の翻訳に誤訳と考えられるものはないのかとの質問があった。発表者は、彼の翻訳作品は概ね高い評価を受けており、漢詩文風に訳すことで「万葉集」の本来の味わいが失われているという先行研究の指摘はあるものの、それは単なる誤訳とはいえないと回答した。陳高峰氏は、日本の際に関して、錢稻孫訳の一部誤訳があることを指摘した。これに関して、司会の伊藤鉄也氏は、「蜻蛉日記」のサイデンステッカー訳を例として挙げ、誤訳であっても名訳と評価される場合があると示唆した。